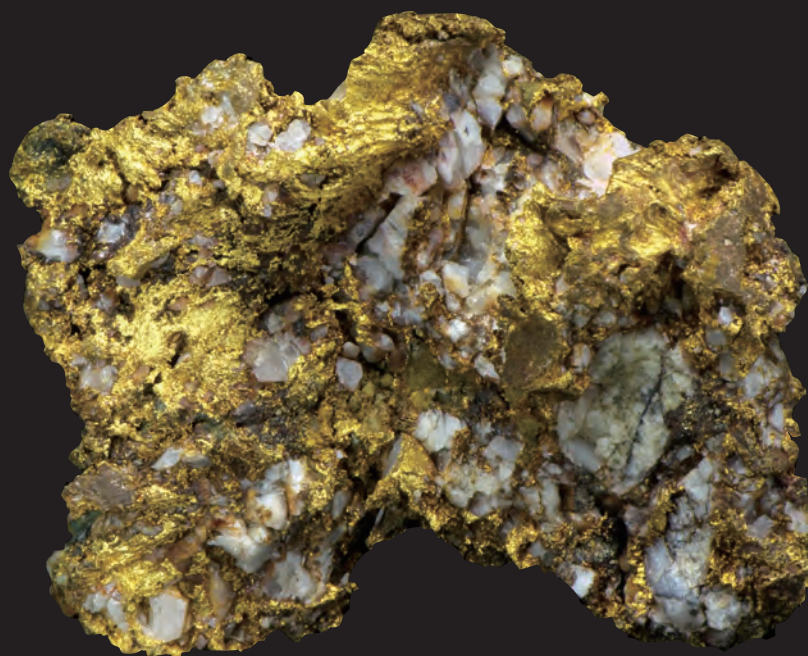


自然金



宮城県気仙沼市鹿折金山産 (GSJ M14585)

Photo by Masahiro Aoki

日本で産出した自然金の標本として最大のもので、標本の総重量は 362 g。発見当初の姿はこの 6 倍もあったと伝えられ、鉱脈中からこれほど大きな自然金の塊が産出することは世界的にも希なので、“モンスターゴールド”と呼ばれています。

モンスターゴールドは、明治 37 年に米国セントルイスで開催された万国博覧会に出品され、世界の注目を集めました。この標本の一部が、金塊発見者であった徳永重康氏（元鹿折金山技師長）からご子息の徳永重元氏（元地質調査所研究職員）を経て、1980 年に地質標本館に寄贈されたものです。地質標本館は、この貴重な標本を恒久的に維持管理し広く市民に供覧する責任を負っています。

鹿折金山は南部北上の気仙沼北方約 10 km の地点にあり、慶長年間に鉱脈露頭が発見されてから 1958（昭和 33）年まで断続的に採掘されました。1903（明治 36）年 12 月、坑口からわずか 24 m のところで脈幅 1.8 m の金の含有量の高い石英脈が発見されました。鉱石 1 トン中に数十グラムの金が含まれていれば高品位鉱と呼んで差し支えないのですが、鹿折金山のこの鉱脈の金濃度は約 20%！桁外れの高品位です。モンスターゴールドは翌年の発見ということですよ（徳永、1980）。

鉱床は、砂岩、粘板岩、玄武岩質の火山噴出物よりなる古生層中に含まれる緩傾斜の石英脈です。この地域に広く分布する白亜紀前期花崗岩が熱源となって、熱水が周辺の地層の割れ目に沿って流動し含金石英脈を作ったものと推定されます。石英脈の石英は乳白色で透明感に乏しく脂肪光沢を示し、そして金は純金色のままに砕けた石英の隙間に濃集しています。これは菱刈鉱山などで見られる、硫化鉱物が濃集した黒い縞模様を持つ含金石英脈とはかなり異なります。参考文献 徳永重元（1980）地質ニュース, no.313, p.16-17.

（産業技術総合研究所 名誉リサーチャー 青木正博）